新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.92
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2017年06月25日

report 01

2016年度総括と2017年度の展望

■当会設立30年目の新しい試み

2016年度は、2015年度の取組に加え、船上からのまちのあり方を見極める新潟市の市民協働モデル事業、鳥屋野潟シジミの会との連携研究事業、全国水環境交流会との多自然川づくりセミナーなど、市民評価と当会の力量を見極める新しい取組も行い、多忙で少し無理をした1年でした。詳細は総会報告としますがサッと1年を振り返り、2017年の活動や取組みたい事業の展望を述べてみたい。

当会の活動の評価は、

①**連携状況評価**：当会が大事にしてきた、産・官・学・民連携の地域ぐるみの取組になっているか。

②**地域住民の評価**：取組を川沿いの地域が評価しているか、取組が地域情報に載っているか。

③**会員参加状況**：会員への広がりがあるか、新しい市民参加者がいるか。

④**資金的な展望**：当会の資金的な見通しやそのための取組、助成事業企画、受託事業の有無。

⑤**取組の展望**：地域に、特に子ども達に夢を提供するなど今後の発展を示せるか。

この5項目として見てみたい。

課題	評	2017年5月達成状況
多様な会員参加から学ぶ	▲	・会員外の多様な市民に参加の場を提供した。会員参加の特典提示が未解決。
会の原点回帰、地域連携・協働の強化	◎	・通船川・栗ノ木川の地域主体でできる舟イベントの担い手支援が未達成。万代高校+OBとの連携活動や長野県団体との上下流連携交流は進んでいる。 ・鳥屋野潟シジミの会との連携での水辺利活用を提案し、種まき事業を進めた。
未来型の水辺まちづくり開発	○	・鳥屋野潟の産業資源10月登録。とやの潟環境舟運などによる活用手法の種まきを継続中。次の段階は未着手
子ども、若者、女性の参加	○	・土方幹夫顧問が開発した車いすカヌーのデビュー。体験者の幅が広がった。常時の若者参加が未達成課題
自立組織化	▲	・日常的な水辺活動の体制、資金問題は継続的な課題。
河川整備と河川管理	▲	・河川協力団体登録は未着手。多自然川づくりと人口減少・過疎化社会での水辺の野生化(ヤブ化)とのバランスを誰がとるかが課題と提言。

■30年の成果と課題の総仕上げ着手の2017年

水辺の環境改善運動は、川まちづくり制度などで一定の整備が進められてきました。でも使われなくなった水辺は排水路になり、管理されない水辺は延々とゴミや野生の棲家になっている。川の中は「河川法」、陸地は「都市計画法」などの基準に縛られ、住民や事業者のかつてのような自由気ままな水辺利用は見られない。結果、本来の水辺の魅力開発を封印しているように見えます。

かつて水辺は全ての生き物が分かち合っていた。人間は水辺に集落をつくり、水を汲み、遊び、学び、眺めて暮らしや生産を続けてきた。その水辺の暮らしの魅力が1960年代まで鳥屋野潟にあったと言います。その豊かさの掘り起こしを戦略として、楽しみながらも、当会の課題である他団体連携+新しい水辺事業の種まきとしてトライしているのが、とやの潟環境舟運'14-'15-'16※です。'17も7月22-23日に予定しています。

※加藤副代表制作編集のとやの潟環境舟運2016映像をご覧ください。
https://www.youtube.com/watch?v=ZTUh-xcPiQg

当会の発足が、映画「柳川堀会割物語」の上映&シンポに始まり、通船川の再生という<課題解決型>運動からスタートした成果と未達成の課題を、<魅力資源再生・創造型>運動に切り替える時期に来たと考えます。

運動を、鮭の遡上できる信濃川の復活事業も、生き物に特化した<課題解決型>の技術、文化アプローチから関係者だけでなく市民や上下流交流を絡め、次世代の子供たちが魚観察と同時に、川遊びや家族ぐるみで川に親しむ<魅力資源再生・創造型>に進化させたい。

そのためには、水辺に「五方良し」(使い手良し・サポート良し・地域良し・環境良し・次世代良し)という新しい“水辺哲学”の世界を実現したい。車イスカヌーのように誰もが楽しめる水辺が究極の目標ではないでしょうか。それには歴史的に積み重ねられた技や伝承、文化と、新しい時代のニーズを取り込む創造的なプラットフォームが必要です。スキルや手段、デザイン、特定の専門家だけでなく多様な人財、業界、支援者などの連携事業体です。そこでは“水辺で満足”“水辺に感謝”をモットーに、環境改善や人財育成、情報記録などに再投資できる『利益還元』の常態化がモラルとして望まれます。モチベーションを持続させる不可欠なモラルと考えます。

特に、高齢少子化、人口減社会が現実になる将来を考えれば、老い先短い私は次世代に、沢山の『水ガキ』を産みだすいい水辺をプレゼントしなければならない。そこに当会の果たす、水仕事の展望が見えます。

ラーニングピラミッド(アメリカ国立訓練研究所)

そこでは子どもが子どもに教える、かつてのガキ大将文化の復活の景色、万代高校カヌー部やOB会水守衆の活躍の景色が見えます。

当会にとって、市内の子供たち、さらに流域の子供たち、福島の子供たちにいい水辺を提供することがこれからの水辺仕事だと考えたい。

子どもが体験を伝える力を持てばベスト

代表世話人　相楽 治

report 02

弱小NPO、鮭遡上の夢の挑戦はまだ続く

◆元副代表　故 石月　升さん

弱小NPOの新潟水辺の会が無謀にも大河・信濃川の活動に挑戦したのは、平成28年7月6日81歳で亡くなられた元副代表の石月 升さんが、平成16年2月11日長野県のラジオ番組へ出演した際の発言からでした。

「新潟水辺の会は、責任をもって鮭を長野県境まで送り届けるので、長野県の皆さんは、松本や上田をゴールに定めて鮭を遡上させてください」と宣言したことをきっかけに、あれから13年目を迎えています。

石月さんは旧建設省出身で、大石ダムの所長を務めた技術屋さんでしたがトンボやホタルを愛し、自然と人間との共生を目指した頑固一徹な人でした。

水辺シンポジウムで発言する石月さん

かつての千曲川は、秋になると多くの鮭が遡上する自然豊かな川で、3,000～20,000尾の鮭が千曲川に遡上していました。だが、昭和10年代に始まった国策の宮中取水ダム（旧国鉄）と、西大滝ダム（東京電力）建設による河川の水枯れなどで鮭の遡上量は激減し、昭和20年以降鮭の遡上は絶えました。

長野県では昭和55年から21年間、県民を挙げて「カムバックサーモンキャンペーン」（899万尾の稚魚放流と西大滝ダム魚道改修）に取り組みましたが、21年間で西大滝ダムまで戻った鮭は僅か48尾でした。

◆石月さんをチーフに鮭復活活動

新潟水辺の会では石月さんをチーフに、地球環境基金と三井物産環境基金の助成申請を行い審査を通り、活動名も「水枯れの大河 信濃川・千曲川に鮭の道を拓く」と命名し、新潟県内の鮭の遡上する河川調査、信濃川・千曲川の河川横断構造物と魚道の調査、河畔林調査、鮭遡上シンポジウム、鮭稚魚放流などを行ってきました。

その中で石月さんは土木技術屋の経験を生かし、河川調査の書類申請、現地調査、十日町・飯山の河道調査や長野の団体との打合わせを積極的に行いました。

◆逆風から少し追い風に

平成18年6月、「千曲川に鮭の遡上できる環境を取り戻したいので鮭の稚魚放流を」と長野に行きました。その際の長野県および長野県民の反応は、「そんなの出来っこない」と大変冷ややかなものでした。

当時の宮中取水ダムから下流に放流される維持流量は7m^3/sであり、また長野県側の西大滝ダムからの維持流量は0.26m^3/sと少ない状態でした。千曲川への鮭の遡上はおろか、新潟県十日町の信濃川への鮭の遡上も50尾に達しない年も多く、長野県への鮭の遡上は夢のまた夢だったのです。

平成9年の河川法改正を受けて、国交省北陸整備局信濃川河川事務所が平成11年、「信濃川中流域水環境改善検討協議会」を立ち上げ、当時の大熊孝代表がその委員として加わっておりました。

その様な状況の中の平成21年3月、JR東日本宮中取水ダムの不正取水によって水利権が停止されました。更に、平成23年3月11日に起こった東日本大震災の津波被害で東京電力の福島第一原子力発電所の事故が起こると、沿川に発電所を持つ企業の対応が変ってきたのです。

◆鮭の稚魚放流開始と鮭の遡上

平成19年度より信濃川・千曲川へ鮭の稚魚放流を始めました。信濃川・千曲川への維持流量の増加と稚魚放流の効果が表れ、平成22年10月20日、実に65年ぶりに信濃川河口より253 kmの上田市の千曲川の簗で体長56 cm、体重1.7kgのオス鮭が発見されました。

その後も遡上数は増え、二桁であった宮中取水ダムまでの鮭の遡上数が四桁の1,514尾まで増えました。

新潟水辺の会稚魚放流数と鮭の遡上変化

年度	新潟水辺の会 鮭の稚魚放流数				宮中ダム鮭の遡上数	西大滝ダム鮭の遡上数
	信濃川水系	千曲川水系	合計	発眼卵埋設		
平成19年	1万尾	4.5万尾	5.5万尾	0	—	—
平成20年	4万尾	9万尾	13万尾	0	—	3尾
平成21年	7.5万尾	12.5万尾	20万尾	0	160尾	2尾
平成22年	16万尾	14万尾	30万尾	0	146尾	3尾
平成23年	東日本大震災により30万尾を信濃川に放流			0	135尾	35尾
平成24年	15万尾	15万尾	30万尾	0	297尾	11尾
平成25年	9万尾	6万尾	15万尾	1万粒	408尾	6尾
平成26年	10万尾	10万尾	20万尾	2万粒	736尾	8尾
平成27年	10万尾	10万尾	20万尾	3万粒	1,514尾	12尾
平成28年	レッドマウス病発生により稚魚放流を自粛			3万粒	493尾	2尾
合計	102.5万尾	81万尾	183.5万尾	9万粒	3,889尾	82尾

◆レッドマウス病の発生

順調に進んだ鮭の遡上でしたが、平成27年2月石川県水産総合センター美川事業所で、サケ科魚類の細菌性魚病のレッドマウス病が発生しました。この病気は人に移ることはありませんが、ほとんどすべてのサケ科魚類に感染すると言われています。

特に長野県はイワナ、ニジマスの養殖場が多くあり、信州サーモンという新種の要職に力を入れており、養殖魚への感染が懸念されました。長野県から自粛要請を受けて、我々はやむなく鮭の稚魚放流及び発眼卵の河床埋設放流の活動を中止しました。

その後2年間レッドマウス病の発生は全国的に無かったものの、その脅威はまだ残っています。

◆鮭発眼卵の河床埋設放流

私たち新潟水辺の会は毎年各機関からの支援を受けて千曲川での稚魚放流を行ってきた中、平成23年度に日本海区水産研究所の飯田真也氏から技術指導を受けて、河床に直接発眼卵を埋設する新しい試みを上田市で行いました。この発眼卵埋設は本州では当会が初めてとのことです。

これは鮭の回帰を人工孵化による稚魚放流にだけ頼るのではなく、自然に委ねながら、持続可能な鮭の生態系維持を目指すものです。平成28年暮れにも信濃川水系の湯の谷川で、長岡市職員の方々の協力を得て行うことができました。ありがとうございました。

◆渋海小学校で、鮭の稚魚育成のお手伝い

県内の小河川で発眼卵の河床埋設放流を行いたいと場所を探していた縁で、長岡市の渋海小学校4年生の総合学習の、鮭の育成のお手伝いをすることになりました。

孵化する際の紫外線を遮る暗幕を取って仔魚を眺める4年生

平成28年11月渋海小学校に行き、鮭発眼卵を入れるための水槽、孵化後の管理、エサのやり方、稚魚放流までの育て方、3月下旬の稚魚放流まで5回旧小国町へ通い、約250尾が元気に育ちました。今年は小雪で助かりましたが、それでも3月15日の稚魚放流では、カンジキを履かないと渋海川には下りられない積雪でした。

その後4年生10名の鮭稚魚の育成と渋海川の水質や生息環境についての活動発表がありました。子どもたちはすっかり、鮭の博士になっていました。

◆多くの人との邂逅

千曲川も良く知らなかった私は、石月さんや大熊先生の後から付いて行くだけでしたが、その中で信濃川・千曲川に関係する人々に邂逅し、多くの人に助けられました。

自然と人間との共生を目指す新潟水辺の会は、川つながりで今井正子長野県議会議員、上田・道と川の駅 おとぎの里の石井孝二さんや、信州水環境マップ・ネットワークの沼田清さん、信州上田千曲川少年団の竜野秀一事務局長、長野大学の高橋大輔教授、少し強面ながら心やさしい裾花漁協の市川典彦組合長、そして長野県の内水面の大転換を進める長野県漁連の藤森貫治会長、大熊先生の教え子が多く勤める長野県庁河川課の方々とお会いすることができました。

65年ぶりに遡上した鮭が発見された上田市千曲川の築場で
長野の皆さんと記念撮影（向かって右端が石月さん）

一方信濃川・千曲川に水力発電所を持つJR東日本や東京電力の方々も、利益を追求するだけの時代ではなく河川環境改善への理解が進み、同じ方向のベクトルに向かって協働ができた近年でした。

◆長野県が稚魚放流

多くの出会いと石月さんの想いが届いたのか、今年2月長野県が来年から5年間の稚魚放流を決定したと信濃毎日新聞の一面に報じられました。

喜んでください石月さん、「水枯れの大河 信濃川・千曲川に鮭の道を拓く」の声が届きましたよ。

信濃毎日新聞 2017年（平成29年）2月24日 金曜日 朝刊 6頁

千曲川にサケを再び稚魚放流へ

県関与で18年ぶり

県・飯山地方3市村・県漁連が協議

信濃毎日新聞

2月24日(金)

信濃毎日新聞朝刊1面（平成29年2月24日）

副代表世話人　加藤　功

■水辺レポート

report 03 「とやの潟環境舟運」と「とやの物語」

たくさんのボートで賑わっていたかつてのとやの潟

鳥屋野潟は新潟市の都心に位置し、巨大な輪中ともいえる亀田郷地区水郷地帯の最底辺部で、かつては潟周辺地域住民の上水や食料庫であり、農漁業や市民の行楽、観光など地域にとって重要な資源でした。しかし、戦後の農業政策のための大穀倉地帯の湿田の乾田化と都市化の拡大で変貌して農業と都市の排水池と化し、市民との関わりが薄れて本来の潟の魅力を実感できない状態となっています。そこで、官民による潟の復活の取組は進められているものの、多様な水辺利用の復活には水深、水質、親水環境などの環境整備と同時に、潟の存在が薄れた地域住民の愛着 (関わり) と「地域の宝」という意識の醸成が必要であり、観光や教育などの広域利用のニーズの対応も図り、「誰もが楽しめる安全で魅力ある潟」としての体制・仕組みが期待されます。それには、潟の価値がより広く認知され、多くの市民が潟再生に貢献し、感動していくことが重要なポイントと考えられます。

多様な舟を体験したとやの潟環境舟運

鳥屋野潟では本来の魅力の復活、再生、創造に向け、自治会による「湖畔清掃（4 月）」、潟周辺の桜祭りの一環での「カナール彩 (5 月)」、「とやの潟環境舟運 (7 月)」、新潟市による「水と土の芸術祭」・「とやの物語（9 月）」・「ハクチョウホワイトフェスタ（2015 年 10 月のみ）」など、ほぼ通年の取組がありますが、これらの中で当会が積極的に取り組んできた 2 つの活動について、ご報告致します。

【とやの潟環境舟運】

とやの潟環境舟運は、まちの真ん中で水辺とふれあいながら暮らせる潟の「 再生と活用の可能性を探る 」ことと共に、広大な水面の潟湖景観を新潟市の都市ブランドのひとつとして考え、湖水面の広がりや自然環境、景観の素晴らしさなどの本来の潟の魅力を、次世代にその遺産を引き継ぐ子どもたちや多くの市民に潟湖の中で体験・体感して楽しんでもらい、潟全体の魅力の復活・再生・創造へ向けた連携・協働による運動や事業の展開のきっかけとして取り組んでいる活動（事業）です。

フロートの浮島に舟から上陸して潟の中からの眺めを楽しむ

この事業は、新潟市南商工振興会、NPO 法人新潟水辺の会、新潟市など約 13 の団体で「とやの潟環境舟運実行委員会」を立ち上げ、船による遊覧ガイドを提供する「とやの潟環境遊覧」として 2014 年よりスタートしました。

2016 年はとやの潟ブランド戦略Ⅱとしてサブテーマを『“潟に公認ボート・カヌーコース場”と魅力を高める湖上島実現の可能性を探る』と題し、①潟中で語る−湖上座談会、②潟中で考える−競艇コース構想、③新堀で遊ぶ−大小のカヌー体験、④潟を飾る−花の潟島、⑤潟で競う−潟島デモレースの 5 つを柱に、7 月の 17 日・18 日の 2 日間で実施しました。

障がい者カヌー

特に、2016 年は新たな試みとして、

1）湖上にフロートで上陸できる花浮き島を作って潟中に浸って安らぐ
2）湖上にカヌーやボートのコースを仮設してのデモ競艇
3）障がい者カヌーから大勢で乗る舟を持ち込む

などで多様な水上体験を行いました。

開催期間中は天気にも恵まれ、3 年目に進化させた鳥屋野潟湖上の“浮島”から『360 度の景色』を大勢の方々にあじわってもらい、湖上利用の『舟レース』や『漁業』、『花景色』、『自然』、『ドローンの可能性』を感じていただけたこと、障がい者カヌーをはじめ様々な親水体験空間を実現できたことなど大変喜ばしく、大成功でした。この年の乗船・体験者等は、延約 900 人でした。

平成 29 年度も 7 月 22 ～ 23 日の開催に向けて準備が始まっています。

【とやの物語】

カナールでのカヌー体験

とやの物語は、新潟市中央区の「特色ある区作り事業」として、毎年 9 月末ないし 10 月初めの 1 日間行われているもので、平成 28 年度で 10 回目の開催でした。

水とともに生きてきた先人たちやこの大地から授かった鳥屋野潟という『宝物』を水の記憶・土の歴史と共に、次世代の子どもたちに伝えていき、自然環境の大切さをみんなで共有したい、という熱い想いがとやの物語には込められています。

当会は平成 22 年度（第 4 回）から協力団体として参画しており、鳥屋野潟運動公園のカナールでのカヌー体験を担当してきました。平成 27 年度からは実行委員会のメンバーとなり、カナールでのカヌー体験に加え、E ボート (10 人乗り木製大型カヌー :2 艇) での鳥屋野潟クルーズとして初めて鳥屋野潟に漕ぎ出しました。平成 27 年度は 150 人がカヌー体験、94 人が E ボート体験を楽しみました。

とやの潟に漕ぎ出す E ボート

平成 28 年度は 10 月 8 日に実施を予定していましたが、天候不良により乗船体験は中止となりました。

平成 29 年度も実施に向けて実行委員会が活動を初めています。

とやの物語カヌー体験のスタッフの皆さん

なお、とやの潟舟運、とやの物語とも、当会のスタッフの他に、万代高校端艇部の生徒さんや OB、各実行委員会の方などの応援を頂き、毎年、落水者等も無く無事終了することができ、乗船の皆様、来場の皆様には大変喜んで頂いています。ここで、当会から参加のスタッフ、応援して頂いた万代高校端艇部の生徒さんや OB、実行委員会の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。今後も宜しくお願い致します。

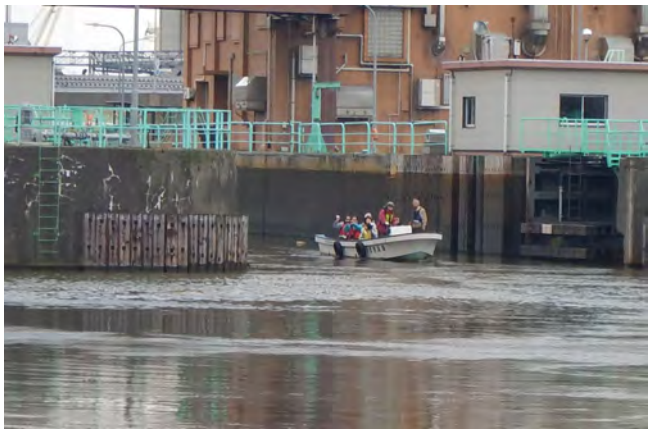
世話人　安田　幸弘

■水辺レポート

report 04

地元が担う川まちづくりへバトンタッチ

春から秋に計５回の川の上から川まちづくりを考える参加者によるモニタリングツアー』の事業を実施しました。新潟市協働事業提案モデル事業で助成金がでているというので、「連携・協働での通船川・栗ノ木川下流の川まちづくり」というテーマでエントリーしました。３位までが合格のところ運よく、２位で合格。当会森本事務局次長は公正を期すために審査員から外れたのは言うまでもないことですが。

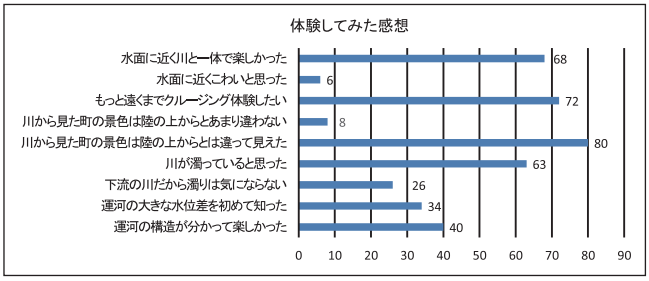


10月９日 通船川閘門クルージング体験

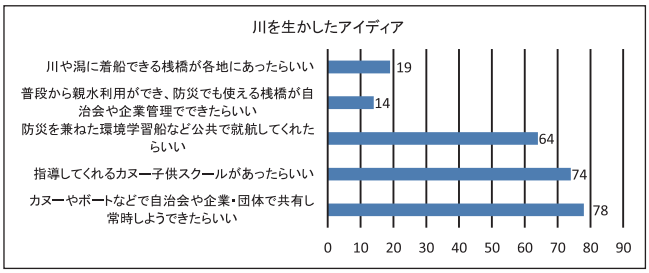
船外機付きの小型ボートと二人乗りカヌー乗船体験など、計５回の舟事業によって、川の中から沿川のまちの魅力を再発見し、地域や参加者とともに川を活かしたまちづくりを提案することでした。

開催日	実施内容
第１回：栗ノ木川さくら祭りカヌー体験支援 H28年４月10日	例年の実行委員会からの要請で万代高校端艇部・OBの協力で地域の子どもたちのカヌー乗船体験を支援している事業にアンケート調査を加えて実施した。
第２回：通船川・栗ノ木川・閘門クルージング＆カヌー体験会 H28年６月25日	協働モデル事業の一環でチラシ等で募集し、閘門クルージングと万代高校端艇部・OBの協力でのカヌー乗船体験、新潟県立大生の協力でアンケート調査を実施した。強風で午前中は閘門見学のみとした。
第３回：通船川中流交流会 親子三世代夏祭りカヌー体験支援 H28年８月20日	例年の実行委員会からの要請で万代高校端艇部・OBの協力で地域の子どもたちのカヌー乗船体験を支援している事業にアンケート調査を加えて実施した。
第４回：とやの物語鳥屋野潟カヌーツーリング体験支援 H28年10月８日	例年の実行委員会の一員としてカヌー乗船体験を支援している。この事業でアンケート調査を加えて実施する予定だったが雨天で中止になった。
第５回：通船川閘門クルージング体験会 H28年10月29日	第４回が中止になったこともあり、閘門通過のクルーズが人気のためにチラシ等で募集し実施した。

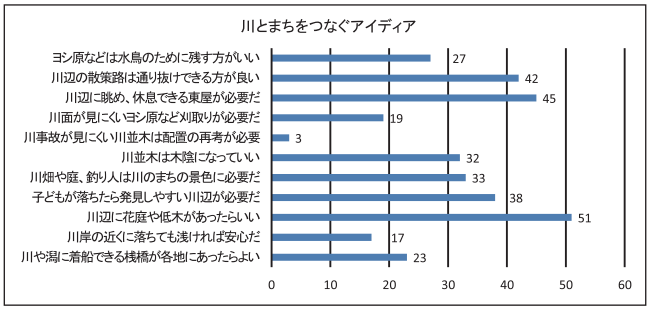
参加者の50%は市報を見て、20%がチラシ、20%が口コミで参加。参加者の3/4がカヌーや乗船体験者であったことから「水辺に関心がある」「水辺が好き」な市民の参加と言えます。以下選択式で尋ねたアンケートの結果を載せます。



・川にある開放感が参加者の心をとらえているのが分かる。同時に、下流域の水は汚いのではなく、田んぼなどの泥の濁りがあることを知ってもらう機会になりました。



・海と大河と潟のある新潟として常時カヌーが乗れる環境への期待が常態化していることが分かる。当会の果たすべき大事な課題として再認識したい。



・川のまちの基本的な条件として、川辺を一周できる散策路とそれを楽しめる木陰や花、川を眺める東屋、子どもたちの川遊びを見守ることのできる環境の維持があげられています。当会から水辺の地域や行政、企業に提案したいと思います。

今回の取組で世話人以外の会員のスタッフ参加は数名でした。この事業は、当会の実力でどこまでやり切れ

4月10日 栗ノ木川さくら祭り

6月25日 通船川閘門クルーズ＆カヌー体験

るかの見極めをすることを裏目標にした取組でしたが自力のみでは限界を感じました。

また、地域定着のために、地域の実行委員会に担い手になる若手のスタッフ参加を要望しましたが無理でした。

8月20日 通船川中流交流会 親子三世代夏祭りカヌー体験

救いは万代高校生などの若手の指導者ですので連携組織化が課題と感じました。「地域自治会が防災を兼ねた舟」を持ち、「地元の子どもたちは誰もが舟の経験者」で、「新潟の水辺を世界に自慢できる」という姿を実現したいものです。

代表世話人　相楽 治

report 05

通船川の美化活動

当会では通船川の美化活動として、河口の森の広場の草刈りや生垣の剪定、通船川の川掃除などを年4回継続して実施しています。

この草刈りや生垣の手入れは新潟市に登録している公園愛護会としての活動でもあります。また、川掃除については、新潟県・新潟市・当会で「うるおいの郷土はぐくみ事業」の協定を交わし、新潟県からは舟の燃料や傷害保険料の補助、新潟市からは川ゴミの回収の支援をいただいています。

2016年から2017年度にかけての参加者は以下のとおりで、2016年度（6月～翌年5月）は合計で58人にご参加いただきました。

実施日	参加人数
2016年5月21日（土）	40人
2016年6月12日（日）	14人
2016年9月24日（土）	14人
2016年10月15日（土）	17人
2017年5月13日（土）	13人
2017年6月10日（土）	12人

活動には新潟市内の建設企業の皆様や、新潟市立万代高等学校端艇部の皆様もボランティアで参加してくださったり、（株）北越紀州製紙新潟工場様より飲み物の差し入れをいただくなどで外部からもご協力をいただいています。

しかし、当会からの参加は世話人がほとんどとなってしまい会員の参加はごくわずかとなっています。

広場だけでも約5,000m^{2}の広さがあり、少人数での作業は大変です。ぜひ会員の皆様からもご協力いただければ幸いです。

河口の森や周辺の利用者の増加にともない、1年ほど前から川ゴミ置き場へのゴミの投棄も目に余るようになり困っていました。そこで新潟市東区建設課と協議した結果、今年4月30日に撤去を行い、状況は良くなったと感じています。

また、河口の森には2014年8月に新潟市によってトイレが設置され、当会では新潟市から委託を受け、万代高校端艇部の皆様にご協力いただきながらトイレの清掃を行っています。2016年度は4月から3月まで118回の清掃や点検を行いました。

また、委託費の一部については万代高校端艇部の活動に役に立てていただこうと、寄付をさせていただきました。

今年度の今後の通船川の美化活動は、9月16日（土）と10月14日（土）の09:00から2時間程度を予定しています。

重複となってしまいますが、会員の皆様からもご参加いただけますよう、あらためてお願いいたします。

事務局　杉山 泰彦

■水辺レポート

report 06

「通船川・栗ノ木川下流沿川まちづくりの会」の開催
～ここに、まちの誇りが流れている～

新潟市の都市化が進む中、阿賀野川と信濃川の河口部に位置する通船川及び栗ノ木川は、流域の住宅地から手が届くくらい近い川です。

通船川は、かつては阿賀野川が信濃川に合流していた清流大河の堤防跡などを残しています。一方、栗ノ木川は亀田郷の排水性を高めるためにくり抜かれたことから「クリノキ川」とも言われる二代目の川です。

昭和初期の頃までは、シジミが取れたりするきれいな川でした。しかし人口が急増し沿川に住宅が張り付き、また工業化も進み沿川に工場も進出し、そこに高度成長期を向かえ環境問題より生産性の向上を優先した結果、全国の各地で大きな負の遺産を今も抱えています。

通船川、栗ノ木川でも汚濁が進みました。この流域で特異なのは新潟地震以降、地盤沈下も重なり水位を下げる低水路方式が採用され、上下流部に水門が設けられ海面より約２m低い閉塞水域となったことです。その環境を改善維持するために上流阿賀野川から水を取り込み下流部で水をくみ出すことを24時間おこなっています。

新潟地震以降、整備された堤防矢板護岸が古くなり流域の方々の改築要望が高まり、県と市は流域の意見を取り入れながら整備を進めるPI方式※を試みることとなりました。それが平成10年に創設された、産官学民による「通船川・栗ノ木川下流再生市民会議」(通称つうくり市民会議)です。

ところがこの年の８月４日の新潟市を中心とする集中豪雨により市内の各所で浸水被害が発生しました。通船川・栗ノ木川の低水路には、流域の降雨が全て集まり排水能力を超えるものでした。その結果、広範囲な浸水被害が発生しました。

そのため、河川激甚災害対策特別緊急事業により排水ポンプ（30m^3/S）の増強が採択され平成15年に完成しました。排水能力は従来のポンプと合わせて毎秒51m^{3}となり、流域の水害に備えています。

「つうくり市民会議」は大熊孝（新潟大学名誉教授）会長の下で、護岸整備が協議テーマでしたので、沿川の方々のいろいろな要望や提案を聞きながら苦労を重ね17年経過して、ハード面の整備が半分以上進みました。平成27年度に、山中知彦（新潟県立大学教授）会長に引き継がれ、川の利活用と環境整備等のソフト面を主に地域の方々と意見交換などをする「つうくり沿川まちづくりの会」として再スタートしています。

今年３月４日(土)に開催された当会の平成28年度フォーラムでは、沿川地域が高齢化に悩む中、県立大学生による若い感覚での地域活性化提案がありました。平成27年度は栗ノ木川沿川を中心に繋ぐをテーマに提案、平成28年度は「ここに、まちの誇りが流れている」をテーマに通船川下流域沿川を中心に多くの通船川プロジェクトが提案されました。

川について語り合う老若男女のパネリスト

また、小中高生や住民による「通船川・栗ノ木川」川柳コンテストを実施し優秀賞の発表・表彰しました。前回は4,400句余りの応募でしたが、今回は1,000句を越える応募がありました。優秀賞の３句「つうくりはゴミ箱ちがうすてちゃダメ」「通船川未来の姿気になるな」「遡上するイトヨの姿今いずこ」に今の川の姿が見えます。

次に沿川地域の高校生、お母さん、お父さんなどと「川について語り合う」デスカッションを行い、「川を中心に素敵な街の発展を期待する」「万代高校端艇部は、川からいろいろな体験を学んでいます」「子どもの頃はきれいな川で、泳ぎ遊び場でした」「山の下排水機場は地域防災の重要な役を担っている」といった意見が交わされました。

山の下排水機場は、今年で設立50年の節目を迎え、いろいろな催しが企画され注目される年です。また、来年平成30年３月に通船川上中流域をテーマにして３回目の「まちづくりの会」を予定していますので、どうぞ皆様お出かけください。

※ PI 方式：public involvement(住民参画) の略

副代表世話人　山岸　俊男

report 07

新潟市里潟学術研究事業 北区・松浜の池、内沼潟の調査

◆新潟市北区　松浜の池

通称「松浜の池」は、阿賀野川右岸河口近くの砂丘地にあり、地元では「ひょうたん池」、「トンボ池」とも呼ばれ、絶滅危惧種のトンボが多く生息しています。

一昨年、当会と松浜地区コミュニティ協議会との協働調査で、池の面積、水深、生物調査を行いました。その調査過程で、池の水位が秋から冬にかけて約 40cm 以上も上昇し、水量は約 9,000m^3 もありました。

阿賀野川と海に囲まれた砂丘地にある松浜の池

地元松浜地区住民も気が付かなかったこの変動は一昨年だけのものか、例年起きていることかを確かめることを目的として阿賀野川河川事務所の許可を得て、池の中に東京湾平均海面標高（TP）に合わせた水位計と水温計を設置しました。その水量や増水の時期、湧水場所の調査、池の変遷の動画化を実施しました。

◆松浜の池の調査結果

池に水位計と水温計を 6 月に設置し現在までの結果、一昨年年同様に池の水位は夏場は最低位を示し、秋から冬にかけて上昇し、1 月末にピークとなり 2 月中旬より下降するもので 2 年間同じ傾向にありました。

池の面積は 2.2 ha ですので、今年も増水量は 9,000 ㎥を超えました。またその変化は、春雪どけ時期に大きく下がる上、日本海潮位とは別な曲線となり、かつ水温・気温に反比例したカーブを描いています。

この池は、阿賀野川や日本海の水位変動の影響を全く受けない、独立した池であることが証明されました。

H 28.7.8 の水位 -TP52cm

H 29.2.8 の水位 -TP92cm

◆新潟市北区　内沼潟

内沼潟はかつての福島潟の一部でした。1816（文化 13）年に築堤された山倉新道（新潟・五泉・間瀬線）によって、福島潟から分離されてできた潟です。

かつて内沼潟は 1.7ha を有していましたが平成に入った頃所有者が変わり、平成 7 年頃より売却された潟は徐々に埋められました。現在の潟は、『内沼潟共有者の会』有資格者の所有地で、潟の面積は 0.6ha と言われてきました。そこで昨年、当会と内沼自治会と協働で内沼潟の空撮、水面面積、潟の水深、潟の生物調査を行いました。

内沼潟は数年前まで、ハスやヒシ、マコモの植生が確認されていましたが現在は何も出ない状況となっています。今年も協働で調査を続けて行きます。

半分以上埋め立てられた内沼潟

◆内沼潟の調査結果

6 月下旬内沼潟の水面面積の電子測量が行われました。これまで 0.6ha（5,969m^2）と呼ばれていましたが、意外にも 1.15 ha（11,530m^2）もありました。

また 9 月、潟に池に定置網 (5 ヶ所)、モンドリ (3 ヶ所) を設置し、翌日に回収し魚類調査を行いました。

コイ、フナなどの大型魚は全く網には入っておらず、あったのはモツゴ、タモロコなどの小魚のみでしかも、クサガメが 154 尾も捕獲される予想外の結果でした。

小魚とクサガメ 154 尾が見つかった内沼潟

副代表世話人　加藤　功

新潟の水辺イベント情報

○とやの潟環境舟運 2017

7月22日（土）～23日（日）10:00～16:00
場所：鳥屋野潟・いくとぴあ食花付近
内容：①浮島・浮橋体験（クイズ付き）　②カヌー、Eボート、障がい者パラカヌー、ウォーターボール等の体験　④板合せ舟クルーズ　③デモンストレーション鑑賞（新堀カヌーレース・ナックル艇）
体験参加費は有料（300～800円）
主催:とやの潟環境舟運 2017 実行委員会(当会も参画)
問合せ：((有) トーゴスタジオ内) 同実行委員会
電話 025-257-0015　メール info@tohgo-studio.co.jp

○ NPO 法人新潟水辺の会　第 17 回通常総会

7月29日（土）14:00～16:00
場所：クロスパルにいがた 405 室
内容：2016 年度事業報告、2017 年度事業計画ほか
終了後に懇親会を予定しています。

○第 1 回阿賀野川大河塾

10月中旬に阿賀野川右岸の光と影を学びながら河口の松浜の池から新潟福島県境の草倉銅山までを日帰りで訪ねます。（当会主催事業、詳細は企画中）

○開港５都市景観まちづくり会議 2017 新潟大会
語り合おう港への想い～歴史と未来がつながる開港 150 周年～

9月2日（土）14:00～16:30　全体会議、基調講演、各都市活動発表　参加無料、要申込
9月3日(日) 09:00～16:30　1～4分科会(現地視察・学習会) 参加費 2～3千円、要申込
会場　新潟日報メディアシップ 2F 日報ホール
主催　開港５都市景観まちづくり会議 2017 新潟大会実行委員会
問合せ　新潟市まちづくり推進課（025-226-2716）

○通船川美化活動

河口の森の草刈り・生垣の選定等、川掃除
9月16日（土）、10月14日（土）09:00～2時間程度
場所：通船川河口の森（各自現地集合）
当会主催事業

○とやの物語

9月30日（土）
場所：鳥屋野潟・いくとぴあ食花付近
内容：①カヌー、Eボート、ウォーターボール等の体験　②板合わせクルーズ　③子ども環境サミット　④潟辺の健康ウォーク　ほか
主催　新潟市中央区
問合せ　とやの物語実行委員会（当会も参画）

○加茂川・能代川の鮭の遡上見学

長野県から見学の皆さんをご案内します。
11月（日付調整中）信州上田千曲川少年団の皆さん
11月18日（土）長野市カルチャーセンターの皆さん
当会主催事業

○新潟水辺の会 30 周年記念水辺シンポジウム

12月上旬予定　当会主催事業

編集後記：　「新潟水辺の会」は今年の10月15日で30周年を迎えます。始まりは、公開されたばかりの宮崎駿監修・高畑勤監督の「柳川堀割物語」の上映とシンポジウム開催でした。この映画はドブ川再生のためのドブ掃除というやっかいな活動を楽しみながら、水の文化や技を掘り起こし、人づくりやまちづくりに結んでいる「柳川市民のこだわり」です。2時間45分というドキュメント映画に感動した私たちは、上映会委員会で終わるのはもったいない（故進副代表談）と新潟市でも会を作ることにしました。そこで大熊前代表から横浜に「よこはまかわを考える会」という提案運動型のユニークな会の紹介があり、大熊前代表、相楽代表、Y女子と私の4人が事務局になり、「柳川堀割物語」を原点に運動イメージすることが出来ました。

1994年にはドブ川通船川再生で汗をかく会として「新潟の水辺を考える会」から「新潟水辺の会」へ、2002年には責任をとれる会として「NPO法人新潟水辺の会」になりました。

今年の12月に「30周年記念水辺シンポジウム」を予定しています。これからも、より異業種団体との連携・協働での水辺環境の再生、水辺のまちづくりや流域連携、各地の水辺活動支援に取組んで次世代にいい水辺をつないでゆきます。興味がありましたら是非、ご参加ください。

編集人：森本　利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会
●事務局　〒950-2264　新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方
Phone　025-264-3191（留守番電話の際は伝言をお願いします。）
●ホームページ　http://niigata-mizubenokai.org　●メール　info@niigata-mizubenokai.org
●会員数　個人会員108人、法人会員8団体、家族会員4人、賛助会員3人、顧問3人（2017年6月1日現在）